

「甘泉賦」新釈新考（二）

『中国語中国文学研究室紀要』第10号（二〇〇七年）には、大学院の演習で楊雄「甘泉賦」を読んだ成果を掲載した。今回はその続編として、今回は取り上げられなかったいくつかの問題に関する考察の結果を発表する。本文で使ったテキストと、注釈の主要なものは次のとおりである。

○顔師古…『漢書』中華書局、一九六二年（「甘泉賦」の本文はこの書を用いた。）

○王先謙…『漢書補注』書目文獻出版社、一九九五年

○李善…『文選』中華書局、一九七七年影印本

○呂延濟、呂向、張銑、李周翰、劉良、六臣注本李善…『六臣註文選』四部叢刊本、一九六七年

○Knechtges… *Rhapsodies on sacrifices, hunting, travel, sightseeing, palaces and halls, rivers and seas* / Xiao Tong ; translated, with annotations by David R. Knechtges, Wen xuan, or, Selections of refined literature ; v. 2) Princeton, N.J. : Princeton University Press 1987

○『揚雄集校注』…張震澤校注、上海古籍出版社、一九九三年（戸倉英美記）

「陰閉」「陽開」について

——「帥爾陰閉、雪然陽開。」——

高 芝 麻 子

「甘泉賦」第三段「天子の行列は千乗万騎を連れ、天空を飛んで甘泉宮へと近づく。」

【おおよその解釈】

「於是乘輿乃登夫鳳皇兮翳華芝。駟蒼螭兮、六素虬。螭略蕤綏、濳虜慘纒。帥爾陰閉、雪然陽開。（是に於いて乘輿は乃ち夫の鳳凰に登りて華芝に翳る。蒼螭を駟にし、素虬を六にす。螭略蕤綏、濳虜慘纒たり。帥爾たるは陰の閉ざすがごとく、雪然たるは陽の開くがとし。）」そこで天子は鳳皇の車に乗り込み、美しい車蓋に隠れ、四頭の蒼螭、六頭の白虬に引かせて出発した。行列の壮麗なる様は、身をくねらせて進む龍のよう、集まっては陰の気が密集している様のようにあり、ちりぢりになつては陽の気が散開している様のである。

このうち、「陰閉」「陽開」について解釈する。

【校勘】

異同なし。

【旧注・旧説の整理】

- (1) 晋灼注（李善注に引く）：「帥、聚也。雪、散也。（「帥」は集まる、「雪」はばらばらになるという意味である。）」
- (2) 李善注：「文子曰、與陰俱閉、與陽俱開。（『文子』には「陰とともに閉ざし、陽とともに開く」とある。）」
- (3) 劉良注：「帥、聚。雪、散也。言聚之則陰閉、散之則陽開。（「帥」は集まる、「雪」はばらばらになるという意味である。これ（行列）が集まれば「陰閉」となり、ばらばらになれば「陽開」になることを言っている。）」
- (4) 王先謙注：「帥與率同。帥爾即率爾、猶言條爾也。雪然猶颯然。（「帥」は「率」と同じである。「帥爾」とは「率爾」のことであり、「條爾」（すみやかに）と同義である。「雪然」とは「颯然」（風の吹く様子）である。）」
- (5) 胡紹煥注（『文選箋證』）：「注晋灼曰、帥聚也、雪散也。按帥雪皆疾貌。帥與率古通。儀禮聘禮古文帥爲率、可證帥爾猶率爾。漢書東方朔傳、先生率然高舉。顏注率然猶颯然。颯亦疾也。本書笙賦、雪燁岌岌。善注、雪燁疾貌。說文颯捷也。雪與颯音義通。俗作颯。（晋灼の注に「帥」は集まる、「雪」はばらばらになるという意味であるとする。思うに、「帥」「雪」はいずれも速い様子を言う。「帥」と「率」は古くは通用していた。古文の『儀禮』『聘禮』は「帥」を「率」に作っており、ここから「帥爾」が「率爾」と同じであることが分かる。『漢書』『東方朔傳』に「先生は率然として高く擧ぐ。」とある。顏師古は「率然」が「颯然」と同義であると注をする。「颯」も速いという意味である。『文選』『笙賦』には「雪燁岌岌」とある。李善の注に「雪燁」とは急で速い様子であると見える。『說文』には「颯」は「捷」であるとする。「雪」と「颯」とは音も意味も通用する。俗に「颯」と作る。）」
- (6) Knechtges 訳：「Suddenly they gather in darkness, Abruptly they open to the light.（急に彼らは闇の中に集まり、不意に彼らは光の中に散開する。）」注：「I follow Hu Shaoying (8.2a) in understanding *shuier* 帥爾 (**shuier-nja*) in the sense of *shuaitan* 率然 (**shuait-nja*), “sudden.” Hu also shows that *sha* of *shanan* 雪然 (**shp-nja*) is a variant

for *sha* 翳 (*srub*), “rappid,” in *Shinwen* (4A.1500a-b). (私は「帥爾」を「率然」(突如)の意味であるとする胡紹煥の解釈に従う。胡は「霅然」の「霅」が同音の「翳」(速い)と通じるとの『説文解字』をも引いている。)

- (7) 『揚雄集校注』：「按、帥與倏、雪與颯、古音聲同。倏爾、颯然皆迅疾之貌。此蓋形容成帝車騎旌旗忽聚忽合、如陰陽之變化。(帥)と「倏」、「雪」と「颯」とは当時の発音が同じである。「倏爾」、「率然」はいずれも迅速である様子を言う。ここでは成帝の行列の馬車や騎馬の旗がたちまち集まる様子が、陰陽の変化のようだと形容しているのであろう。)」

- (8) 鶴田久作注『文選』国民文庫刊行会國譯漢文大成、一九二二：「帥爾。聚る貌。陰閉は聚るをいふ。霅然。散ずる貌。陽開は散ずるをいふ。」

- (9) 小尾郊一訳『文選(詩騷篇)』集英社全釈漢文大系、一九七四：「その行列は月の小さくなるように集まり、また太陽の輝くように散り、」

- (10) 中島千秋訳『文選(賦篇上)』明治書院新釈漢文大系、一九七七：「急に闇に隠れたかと思うと、突然光の中に現れ、」

- (11) 小竹武夫訳『漢書』下巻、筑摩書房、一九七九：「あわただしく聚まってひそかに閉じ、霅然と散ってあらわに開き、」

【問題提起】

該当八文字のうち「帥爾」「霅然」に対しては多くの注釈が見える。諸注釈を大まかに分ければ、「帥爾」を集まる、「霅然」を散るという意味で理解するもの(晋灼、五臣劉良、鶴田久作、小尾郊一)、「帥爾」「霅然」を速い様子として理解するもの(王先謙、胡紹煥、Knechtges、『揚雄集校注』、中島千秋、小竹武夫)の二種類に分けられる。また、李

善、顔師古は普灼を引いているので、前者の解釈を採っていると考えてよいだろう。

一方、「陰閉」「陽開」に対しては、李善が『文子』を引き、鶴田が「陰閉は聚る」「陽開は散する」とするのみで、注釈に乏しい。Knechtgesは「陰閉」を「闇の中に集まり」、「陽開」を「光の中に散開する」と訳し、小尾は「月の小さくなるように」「太陽の輝くように」として、「陰」と「陽」とを闇と光、月と太陽として訳出する。一方、『揚雄集校注』は「旗がたちまち集まる様子が、陰陽の変化のようだ」と「陰陽」の語をそのまま留める。

本論では、「陰陽」と「開」「閉」をともに用いる様々な用例を分析し、句の意味するところを明らかにしたい。

【用例・考察】

1 「陰」「陽」が「開」「閉」する

まずは「陰陽」が「開」「閉」する場合について、見てゆきたい。

〔用例①〕『莊子』雜篇「説劍」に「制以五行、論以刑徳、開以陰陽、持以春夏、行以秋冬。（制するに五行を以てし、論するに刑徳を以てし、開くに陰陽を以てし、持するに春夏を以てし、行くに秋冬を以てす。）」とある。ここでは天子の剣のあり方を述べているのだが、「五行」を用いて「制」（制定）し、「刑徳」によって「論」（論断）じ、「陰陽」に従って「開」き、「春夏」のように「持」（維持）し、「秋冬」のように行（蕭殺）するものであるという。ここで「陰陽」は、「制」や「論」において「五行」「刑徳」が抛るべきものであったのと同様に、「開」において抛るべきものとなっている。「陰陽」にとつて「開」はその特性として捉えられているのである。この表現においては、「閉」という概念は見出せないが、〔用例②〕には「陰陽」が「開閉」するという表現が見える。

〔用例②〕『史記』卷二七「天官書」の索隱に引かれる緯書『春秋元命苞』にはこうある。

紫之言此也、宮之言中也、言天神運動、陰陽開閉、皆在此中也。⁽¹⁾（紫は之此を言ふなり。宮は之中を言ふなり。天神運動して、陰陽開閉するは、皆な此の中に在るを言ふなり。）

「紫宮」について、「紫」は「此」に通じ、「宮」は「中」に通じていると述べて、天神の運動、陰陽の開閉は全て此の中（紫宮の内）に司られているから紫宮（此中）と呼ぶのだとしている。ここに見える「天神運動」とは天の神のめぐり、即ち、天体の運行を指すのであろう。天体の運行とともに、天上世界の中心紫宮が司っている、陰陽の開閉とは、この世界の運行に関わる要素だと考えられる。『莊子』に見えた「開以陰陽」では「開」が「陰陽」に関わる性質であると理解されていたが、この「陰陽開閉」では「陰」と「陽」の双方が「開閉」に関わってきている。『莊子』においては、恐らく陰陽が交互に開く（盛んになる）ことを述べ、『春秋元命苞』では、陰陽のいずれかが開けば（盛んになれば）、いずれかが閉じる（沈静化する）と述べているのである。この両者の発想の間には大きな相違点はないものと考えられる。

なお、この発想には、〔用例③〕のように互文形式を採るものも見える。

〔用例③〕宋・欧陽脩「唐李德裕平泉草木記」（『集古録』巻九）に「陽開陰閉、變化無窮。（陽開き陰閉ぢ、變化無窮なり。）」とある。この用例は恐らく、「陽」が開き続け、「陰」が閉じ続けることを言っているのではなく、「陰陽」が「開閉」することで昼夜、四季などの自然界の変化が続くと述べているものと思われる。

以上のように、「陰陽」が「開閉」することによって、自然の循環が起こるとする発想があった。ただし〔用例①〕

は「開」のみであり、「用例②」「用例③」は時代が下るので、揚雄のころにこのような表現が成り立ち得たかは、疑問が残る。

2 「陰」「陽」いずれかが「開」「閉」する

「陰陽開閉」は世界の運行そのものを示していることを以上に論じた。だが、「陰」と「陽」のいずれかが閉じ、いずれかが開く状況を表現している場合もある。以下に例を挙げる。

〔用例④〕宋・蔣防「登天壇山望海日初出賦」〔『文苑英華』卷四〕（抜粋）

客有愛此早景、登茲崇山。候東方之昏黑、據中頂之孱顔。俄而陽開陰閉、翕絶廻還。曳晨光於莽蒼之外、走狂電於溟濛之間。（客の此の早景を愛する有り、茲の崇山に登る。東方の昏黑を候ち、中頂の孱顔に據る。俄かにして陽開き陰閉ち、翕絶として廻還す。晨光を莽蒼の外に曳き、狂電を溟濛の間に走らす。）

この賦は大きく時代が下るが、イメージが湧きやすいものだろうと思われるので、まず挙げることにした。蔣防は夜明け前から山に登っている。真つ暗な東の空を眺めながら、日の出を待っていると、「陽開陰閉」して日が昇る。そこから朝日の描写が始まるのだが、ここでは、夜が終わり、朝が始まることを、陰が閉じ、陽が開くと表現している。陰が沈静化し、陽が活性化することが、暗い夜から明るい朝への移行と重なり合うのである。

では、逆に、陽が閉じ、陰が開くとうなるか。

〔用例⑤〕『國語』「吳語」卷一九

王乃入命夫人。王背屏而立、夫人向屏。王曰「自今日以後、内政無出、外政無入。内有辱、是子也。外有辱、是我也。吾見子於此止矣。」王遂出、夫人送王、不出屏。乃闔左闔、填之以土。（王乃ち入りて夫人に命ず。王は屏に背きて立ち、夫人は屏に向く。王曰く「今日より以後、内政出でる無く、外政入る無し。内に辱有るは、是れ子なり。外に辱有るは、是れ我なり。吾は子と見ふこと此に止めんか」と。王遂に出でて、夫人王を送るも、屏を出でず。乃ち左闔を闔ぢ、之を填むるに土を以てす。）

注：閉陽開陰、示幽也。（陽を閉ざし陰を開き、幽を示すなり。）

この用例で「閉陽開陰」の四字が見えるのは、本文ではなく注釈である。『国語』の注釈は三国呉の韋昭による。ここでは、「乃闔左闔、填之以土。」という本文に対し「閉陽開陰、示幽也。」と注を施している。「左闔」とは左の門であり、左は陽、右は陰である。注に抛れば、陽（左の門）を閉ざし、陰（右の門）を開くことによって「幽」（喪中）を示しているのだという。陽の働きを弱め、陰の働きを強め、幽＝陰の状態を作り出したのである。

すなわち、「陰」や「陽」は「開」であるときには働きを強め、「閉」であるときには働きを弱める。（用例④）は宋代、（用例⑤）の注は三国呉のものであるが、韋昭の注釈が正しいのであれば、この発想そのものは、先秦からあったものと考えられるだろう。

3 「陰」＝「閉」、 「陽」＝「開」

2では「陰」「陽」いずれもが、それぞれ開くことも閉じることもあった。だが、陰はその性質が「閉」であり、陽は「開」であるとの発想も、一方では見受けられる。

〔用例⑥〕『史記』卷二四「樂書」

使之陽而不散、陰而不密、剛氣不怒、柔氣不懾、四暢交於中而發作於外、皆安其位而不相奪也。（之をして陽にして散ぜず、陰にして密ならず、剛氣にして怒らず、柔氣にして懾^{おそ}れざらしむれば、四は中に暢交し外に發作し、皆其の位に安んじて相奪はざるなり。）

正義：閉陽開陰、抑剛引柔、悉使中庸。故天下安其位、無復相侵奪之也。（陽を閉ざし陰を開き、剛を抑へ柔を引き、悉く中庸たらしむ。故に天下は其の位に安んじ、復た之を相侵奪する無きなり。）

ここでは中庸を表現するにあたって、陰陽については「陽而不散、陰而不密。」と述べている。陽は本来「散」なのであるが、それを「不散」にし、陰は本来「密」なものであるが、それを「不密」にする。そこに附された唐・張守節の正義は、「不散」「不密」にすることを、陽については「閉」、陰については「開」という動詞を用いて表わしている。陽はもともと「開」（＝散）であつたので「閉」ざし、陰は「閉」（＝密）であつたので「開」くことで、「不散」「不密」の状態になしたのである。

〔用例⑦〕後漢・班固「西都賦」（『文選』卷一）に「張千門而立萬戸、順陰陽以開闔。（千門を張り萬戸を立て、陰陽に順ひて以て開闔す。）」とある。ここでは、宮殿のたぐさんの門が朝に開き、夕に閉じることを言っているが、朝が陽であり、夕が陰である。そして、陽となれば開き、陰となれば閉ざす（闔）様子を、陰陽にしたがってと表現していることから、陽が開、陰が閉と密接な関わりを持つて連想されていたであろうことが分かる。

〔用例⑧〕唐・韓愈「新修滕王閣記」（『記纂淵海』卷六四）に「春生秋殺、陽開陰閉。（春は生じ秋は殺し、陽は開き陰

は閉づ。」とある。ここでは王仲舒の政治を称えているが、春のように穏やかに恩を施し、秋のように厳しく法を用い、陽のように利を盛んにし、陰のように害を封じるとしている。これも春の性質が「生」、秋が「殺」であるのと同様に、陽は「開」、陰は「閉」という性質を持つことから生じた言い回しであろう。

〔用例⑨〕唐・崔融「嵩山啓母廟碑」（『文苑英華』卷八七八）の序に「其居處也、曖曖昧昧、陰閉陽開。（其の居る處や、曖曖昧昧として、陰は閉ぢ陽は開く。）」とあるが、これは、嵩山の啓母廟が薄暗く、陰の気は凝縮し、陽の気は拡散している、すなわち陰陽の本来あるべき姿を保っていることを述べ、称賛しているのである。

以上、「陰陽」と「開閉」が関わって用いられている用例を三つに分けて分析した。では、ここで揚雄「甘泉賦」に戻ろう。当該句「帥爾陰閉、雪然陽開。」は、いずれの分類に当てはまるのであろうか。1の「自然界の運行」を表す用例は、〔用例③〕に見えるように、互文の構造を取り「陰閉陽開」と表現される可能性を含んでいるが、ここでは意味的に相応しくない。2で解釈すれば、「陰の力を弱め、陽の力を強める」という意味になるが、ことさらに陽の気を強めねばならぬ場面でもない。ここでは、やはり3の意味で解釈するのが妥当であろう。

すなわち「陰閉」と「陽開」とは、陰陽の本来の姿である。李善が引く『文子』が「與陰俱閉、與陽俱開。」としているのも、陰が「閉」、陽が「開」という性質をもともと備えているとの発想（3）に拠るものと考えられる。『文子』『道原』に見えるこの句は、全く同じ句が『淮南子』『原道訓』にも見えている。『文子』の成立時期、成立過程については諸説あるが、『淮南子』は揚雄以前に成立している。『文子』『淮南子』の用例が3の発想であると考えられることから、揚雄「甘泉賦」の解釈に3を用いることは、時代的にも十分な妥当性を持つと言えるよう。

【結論】

最後に「帥爾陰閉、霑然陽開。」の八文字全体の解釈について述べたい。「帥爾」「霑然」を集まる、「霑然」を散るという意味で理解する注釈と、「帥爾」「霑然」を突如の意味に取る注釈とがあることを、【問題提起】においてすでに整理した。注釈のうち、集まる、散るという意味だとするものは、晋灼、五臣、及び晋灼を引く李善、顔師古であり、速い様子であるとするものは、王先謙、胡紹煥、Knatchbullら清代以降の注釈者である。五臣もほぼ晋灼の引き写しであることから、唐代においては、これらの句は晋灼の解釈が採用されていたのであろうことが窺える。「帥爾」を集まることであると理解すれば、それは陰の本来の姿である「閉」と結びつき、「霑然」も「開」に結びつく。その連想から「帥爾」「霑然」の晋灼の解釈が受け入れられたのであろう。実際、3の用例に見えるように、唐代には「陰閉」「陽開」という発想が広く用いられていたことは間違いない。そして李善が指摘している通り、その発想は『文子』（あるいは『淮南子』）にまでさかのぼることができ、揚雄の賦の解釈に適用することに差し支えはないのである。清朝に至り、考証学者たちが、賦の一字ずつの意味を検討し直した結果、新たに「速い様子」という解釈が生じたのではないかと思われる。

もちろん、3の解釈で「陰閉」「陽開」を理解したとしても、「帥爾」「霑然」を「速い様子」「突然」の意味で取ることは不可能ではない。だが、「飛蒙茸而走陸梁。（飛びては蒙茸たりて走りては陸梁たり。）」のように、動作（飛／走）の後にその様子の形容（蒙茸／陸梁）を続ける句はしばしば見える。また、集まったり散開したりする様が急であることを描くより、その様が陰陽のあるべき姿と一致していると描写した方が、天子の行列への賛辞として相応しいものであろう。以上の考察を踏まえ、この二句は「集まっては陰が密集している様ようであり、ちりぢりになっては陽が散開している様ようである。」と訳すこととしたい。

注

(1) 『文選』卷一の班固「兩都賦・西都賦」に引かれる『春秋元命苞』では「紫之言此也、宮之言中也。言天神圖法、陰陽開閉、皆在此中也。」となっており、「圖法」とは未来を司る図讖の類である。

天の九層か、地下の九層か

——「漂龍淵而還九垓兮、窺地底而上回」——

遠藤星希

「甘泉賦」第八段「甘泉宮に着いた天子が、賢能の臣下とともに、天上地下をへめぐった後、祭祀の場に臨む。」

【おおよその解釈】

「建光燿之長旂兮、昭華覆之威威。攀璇璣而下視兮、行遊目虜三危。陳眾車於東阮兮、肆玉鈇而下馳。漂龍淵而還九垓兮、窺地底而上回。（光燿の長旂を建て、華覆の威威たるを昭らかにす。璇璣に攀ちて下視し、行くゆく目を三危に遊ばしむ。衆車を東阮に陳ね、玉鈇を肆にして下馳す。龍淵に漂かびて九垓を還り、地底を窺ひて上に回る。）」

光でできた長い旗を立て、華蓋の羽飾りの華麗なさまを明らかに示す。北斗七星に攀じのぼって下を見やり、車を走らせながら、三危山をはるかに眺めわたす。数多くの車を東の山にならべ、玉の車輪をほしのままにめぐらせて馳せくだる。龍淵に浮かんでから、九層構造の中を駆けめぐり、地の底を窺い見てから上に帰る。

このうち、「漂龍淵而還九垓兮、窺地底而上廻」について解釈する。

【校勘】

『文選』五臣本・六臣本では「回」を「廻」に作る。

【旧注・旧説の整理】

- (1) 顔師古注引晋灼注：「九垓、九垓也（九垓とは、九重のことである）。」
- (2) 顔師古注：「假設言周流曠遠、升降天地、爲神通一也。還讀曰旋（はてしなく広い空間の中をあまねく駆けめぐり、天地を昇り降りして、神と通じること、仮定して言っているのである。還は旋として読む）。」
- (3) 李善注引応劭注：「龍淵在張掖（龍淵は、張掖にある）。」
- (4) 李善注引服虔注：「九垓、九重也（九垓とは、九重のことである）。」
- (5) 李善注：「言從東阬下馳、遂浮龍淵而繞其九重、乃窺地底而上歸也。說文曰、漂、浮也。莊子曰、千金之珠、在九重之淵驪龍領下。廣雅曰、垓、厓也。亦重之義也。還、音旋（東海から馳せくだって、そのまま龍淵に浮かんでその九重を駆けめぐり、そして地の底を窺い見てから上に帰ることを言っているのである。『説文』には「漂は、浮かぶこと」とある。『莊子』に「千金に値する珠は、九重の淵にいる黒龍のあごの下にある」と見える。『広雅』に「垓は、厓と同じ」とある。これも「重」の意味である。「還」の音は「旋」と同じ）。」
- (6) 呂向注：「龍淵、劍名。言浮龍淵旋經九重之高、窺見地底而上歸。廻、歸也（龍淵とは劍の名である。龍淵という劍を浮かべて、九重の天の高さをめぐり経て、地の底を窺い見てから上に帰ることを言っている。「廻」は帰ることである）。」

(7) 王先謙注引宋祁注：「注文爲神通一也。爲當作與。一字當刪（注の文には「爲神通一也」とある。「爲」は「與」に作るべきであり、「二」の字は削るべきだ）」。

(8) 王先謙注：「説文、漂、浮也。詳文意、從北望南、自東徂西、乃至禮神之所（『説文』には、「漂は、浮かぶ」とある。文の意味を詳しく言えば、北から南を望み、東から西にゆくことによって、やっと神を祭るところに至った、ということである）」。

(9) 『揚雄集校注』：龍淵、指大海。還、讀旋、周遊。九垓、九涯、指龍淵邊岸。九謂多數。言從東阮下馳、溪龍淵繞其涯岸、乃窺地底而上歸（龍淵は大海を指す。還は旋と読んで周遊の義である。九垓は九涯のことであり、龍淵の沿岸を指す。九は数が多いことを言う。東の岡から龍淵に馳せくだって、その岸辺をぐるぐるめぐり、そして地底を窺い見てから上に帰ることを言っているのである。「溪龍淵」の「溪」は意味が分らない。衍字として訳出した。）

(10) Knechtges 訳：「Drifting on Dragon Pool, circling the Nine Divisions, He peers under the earth and turns upward.（龍淵を漂流し、その九層構造のなかを旋回して、天子は地下を凝視してから上に引き返す）」。

(11) 小尾郊一訳（『文選（詩騷篇）』集英社全釈漢文大系、一九七四）：「九重の龍淵に漂い巡り、地の底をうかがい見たのち再び上昇してくる」。

(12) 中島千秋訳（『文選（賦篇上）』明治書院新釈漢文大系、一九七七）：「龍淵に浮かんでから、九重の地の底を巡り見て、地上へ戻られた」。

(13) 小竹武夫訳（『漢書』下巻、筑摩書房、一九七九）：「龍淵に漂んで天外を環り、地底を窺いて上り回る」。

【問題提起】

「九垓」の解釈が大きく二つに分かれている。一つは「九層の天」とするもの、もう一つは「（龍淵の）九層構造」とするものである。五臣（呂向）・小竹氏は前者の説を、李善・Knechtges・小尾氏・中島氏は後者の説をとる。また『揚雄集校注』は、「九垓」を龍淵の岸辺とし、「九」は数の多いことをいうとする独自の解釈をくだす。このうちのどれが、最も適切であろうか。

【用例・考察】

〔用例①〕『淮南子』卷十二「道應訓」に「今子游始於此。乃語窮觀、豈不亦遠哉。然子處矣。吾與汗漫、期于九垓之上、吾不可以久。（今 子の遊ぶこと此に始まる。乃ち窮觀を語るも、豈に亦た遠からずや。然れども子^ま処れ。吾汗漫と、九垓の上に期す。吾以て久しくすべからず）」とある。話の背景は以下の通り。盧敖という方士が、北海を周遊して一人の男に出会った。盧敖はその男に、自分は天地四方の外を隅々まで見極めたぞ、と自慢する。男はそれに対して、「私は、南は閭閻の野に遊び、北は沈墨の郷に憩い、西は宵冥の里を極め、東は鴻濛（日出の地）の光をもつらぬいたものだ」と自身の周遊歴を披露し、そのあと「さらにその外側が存在するのだが、私もまだそこには行ったことがない」と述べる。先に引いたのは、そのあとに続く男の台詞である。高誘の注に「汗漫、不可知之也。九垓、九天之外」とあり、これによって引文を訳すと、「おぬしの遠遊は今ここに始まったばかりだ。それなのに遊観を極めたかのように言っているが、前途はなんと遠いことか。だがまあここにいなさい。私はこれから汗漫（もとは高誘の言うように渺茫として知りえないこと。ここではそれを擬人化している）と九重の天の上で会う約束をしているので、ゆっくりとはしてはいられないのだ」となる。

〔用例②〕『莊子』雜篇「列禦寇」に「夫千金之珠、必在九重之淵而驪龍頷下。子能得珠者、必遭其睡也。（夫れ千金の

珠は、必ず九重の淵にして驪龍の領の下に在り。子の能く珠を得たるは、必ず其の睡りに遭へばなり」とある。翻訳すると、「いったい千金の珠というものは、必ず幾重にも深い淵の底で黒龍の領の下にあるものだ。お前が珠を取つてくることができたのは、きっと龍の眠つてるときにめぐりあつたからだ」となる。

〔用例③〕張衡「思玄賦」に「迅焱瀟其膝我兮、驚翩飄而不禁。越谿咽之洞穴兮、漂通川之砾砾。經重厖乎寂寞兮、慙墳羊之深潛。追荒忽於地底兮、軼無形而上浮。（迅焱は瀟として其れ我を膝り、驚せて翩飄として禁ぜず。谿咽たる洞穴を越え、通川の砾砾たるに漂ふ。重厖の寂寞たるを經、墳羊の深潛を慙む。荒忽を地底に追ひ、無形を軼ぎて上り浮かぶ）」とある。李善の引く旧注に「谿咽、大貌。漂、浮也。砾砾、深貌。重陰、地下也。寂寞、靜貌。厖、古陰字。墳羊、土精怪也（谿咽は、大きいさま。漂は、浮かぶこと。砾砾は、深いさま。重陰とは、地下のことである。寂寞は、静かなさま。厖は陰の古い字体。墳羊は、土の精霊である）」とあり、李善注に「荒忽、幽昧貌。甘泉賦曰、窺地底於上回。（荒忽は、奥深く暗い様子である。甘泉賦に、地底を窺つてから上に帰る、とある）」とあり、五臣注（呂延濟）に「言風送我、其行輕疾、越空大之穴、浮廣深之淵、經地下幽靜之界、念土精於此潛處。（風が私を送ってくれて、進むのが軽やかで速くなり、広大な洞穴を越え、広くて深い淵に浮かび、地下の奥深く静かな世界を經て、土の精をこの潜つた場所でおもうことを言っている）」とある。これらによつて訳出すると、「疾風が吹いて私を送ってくれ、速く軽やかに馳せていつて邪魔するものもない。大きな洞穴を越え、深々と流れる大川に浮かぶ。静かな地中を過ぎ、地の底深く潜む土の精霊の墳羊をあわれむ。捉えどころのない何かを地底で追いもとめ、無形の混沌とした場所を過ぎて上に浮かんでいく」となる。

【結論】

五臣の呂向や小竹氏が、「甘泉賦」の「九垓」を「九重の天」と解したのは、「九垓」と同義の「九垓」によって天を指す例が少なくないからと思われる。中でも用例①に挙げた『淮南子』『道應訓』では、東西南北の地の果てを極めた男が「九垓之上」に昇る、という記述があり、東西南北の地を周遊した天子が「九垓」をめぐる「甘泉賦」の構成との類似が認められることも、呂向らの解釈の基づくところかもしれない。

しかし、必ずしも九層¹¹天ではない。『莊子』『列禦寇』に見えるように、深い「淵」をも九層構造をもつものとして捉える見方が存在している。また、李善注が「思玄賦」の「追荒忽於地底兮」に対して、「甘泉賦」の「窺地底於上回」を引いていることは、注目に値する。というのも、「思玄賦」の主人公の遍歴は、「甘泉賦」における天子の周遊を、明らかに下敷きになっているからである。

先に引いた王先謙の注に「從北望南、自東徂西、乃至禮神之所」とあるように、甘泉宮に到着した天子は、祭祀を始めるまえに、東西南北を遍くめぐる。具体的には、北の北斗七星によじ登って下を見やり（攀璇璣而下視兮）、車を走らせながら南の三危山をはるかに眺めわたり（行遊目虜三危）、さらに東の山から馳せくだり（陳衆車於東阮兮、肆玉軼而下馳）、西の「龍淵」に浮かんてから「地底」を窺う（漂龍淵而還九垓兮、窺地底而上回）のである。そして「思玄賦」の主人公も、『後漢書』の李賢注に「既遊四方、又入地下」と言うように、東（三神山・扶桑）、南（会稽山・長沙・卬州）、西（軒轅国・汪氏国）、北（太陰・寒門）四方それぞれの果てを極めたのちに、「通川」に浮かんて、「地底」に潜るのである。主人公が東西南北へ周遊するという構成は、言うまでもなく離騷にその原型を見るべきであり、「甘泉賦」も「思玄賦」も当然その影響下にある。だが、具体的な經由の地や周遊のさまを描写した部分について言えば、「思玄賦」が直接的に「甘泉賦」を下敷きにしていたことは疑いない。そのことは、「思玄賦」において、主人公の乗る車の進行を風が手助けするところ（迅焱瀟其騰我兮、驚翩飄而不禁；「甘泉賦」風從從而扶轄兮）、また地底から上に帰ってきたのちに、西王母と会見して親しみ（聘王母於銀臺兮、羞玉芝以療飢。戴勝愁其既歡兮、又謂余之行遲；「甘

泉賦」想西王母、欣然而上壽兮、それとは反対に玉女と宓妃をしりぞけるところ（載太華之玉女兮、召洛浦之宓妃。（中略）雙材悲於不納兮、並詠詩而清歌：「甘泉賦」玉女無所眺其清盧兮、慮妃曾不得施其蛾眉）等に、端的に表れている。そして「思玄賦」における「地下」が、「重膺」と表現されていることに注意したい。この「重」字は、地底に至るまでに経過する地下が層状として捉えられていることを示す。そうである以上、「思玄賦」が下敷きにした「甘泉賦」で、天子が淵に浮かんだ後にめぐる「九垓」も、「地底」に至るまでに経過するべき地下の九層構造とみるのが正しいであろう。

注

（1）三危山は、『水經注』卷四十に「三危山在燉煌縣南」とあるなど、一般には西方にある山とされることが多い。だが、「甘泉賦」の当該句に対して、李善注は『尚書』「禹貢」の「導黑水、至于三危、入于南海」を引用しており、孔安国の伝に「黑水自北而南、經三危、過梁州入南海」とあることから、三危山が南にあるという説もあり、少なくとも李善はその説に従っていたことが窺える。王先謙が「從北望南」と注していたのも、このような理解に基づくのであろう。筆者もこの考えに従う。

鸞鳳と天子の車はいかなる関係にあるか

——「鸞鳳紛其御蕤」——

遠藤星希

【おおよその解釈】

「漂龍淵而還九垓兮、窺地底而上回。風從從而扶轄兮、鸞鳳紛其御蕤。梁弱水之漚濊兮、躡不周之透蛇。（龍淵に漂か
びて九垓を還り、地底を窺ひて上に回る。風は從從として轄を扶け、鸞鳳は其の御蕤に紛る。弱水の漚濊たるに梁かけ、
不周の透蛇たるを躡む。）」

龍淵に浮かんでから、その九層構造の中を駆けめぐり、地の底を窺い見てから上に帰る。風はびゅうびゅうと吹いて
車輪の進行を助け、鸞や鳳凰は、車に垂れ下がった紐の飾りに入り混じる。沸きたつ弱水に橋を架けて渡り、険しい不
周山を踏み越える。

このうち、「鸞鳳紛其御蕤」について解釈する。

【校勘】

『文選』では「御」を「銜」に作る。

【旧注・旧説の整理】

- (1) 顔師古注：「御、猶乗也。蕤、車之垂飾纓蕤也。今書御字或作銜者、俗妄改也（「御」は「乗」と同じである。
「蕤」とは、纓蕤（冠の上の飾りもの）のような、車に垂らす飾りである。今本で、「御」字を「銜」に作るも
のは、俗人が根拠もなく書き改めたのである。）」
- (2) 李善注引晋灼注：「蕤、綏也（蕤は、紐の飾りのことである。）」
- (3) 呂延濟注：「言使疾風扶車轄、鸞鳳銜纓綏也（車輪が進むのを疾風に助けてもらい、鸞や鳳に紐の飾りを口に
くわえさせることを言っている。）」
- (4) 王先謙注引宋祁注：「注文纓蕤字上、當有若字（注文の「纓蕤」の上には、「若」字があるべきである。）」

(5) Knechtges 訳…「Simurghs and phoenixes tangle in His chariot fringe. (シムルグやフェニックスが、天子の馬車のふさ飾りと入り乱れるように飛ぶ)。」

(6) 小尾郊一訳(『文選(詩騷篇)』集英社全釈漢文大系、一九七四)：「鸞鳳は車のひもをしきりにくわえて走る。」

(7) 中島千秋訳(『文選(賦篇上)』明治書院新釈漢文大系、一九七七)：「鸞や鳳凰がいり乱れて、車のひもをくわえて助けて飛ぶ」。

(8) 小竹武夫訳(『漢書』下巻、筑摩書房、一九七九)：「鸞鳳紛としてそれ車の垂飾りに乗り」。

【問題提起】

『漢書』系統のテキストでは「御薙」に、『文選』系統のテキストでは「銜薙」に作るという大きな異同があり(「銜」の異体字「啣」と、「御」字との字形の類似によって訛りが生じた可能性が高い)、どちらの字を選択するかで解釈も変わってくる。顔師古は「俗妄改也」として「銜」字をしりぞけ、「御、猶乗也」と注する。この「乗」を動詞として一句を訓読すれば、「鸞鳳は紛として其れ薙に御り」となり、車を意味する名詞として訓読すれば、「鸞鳳は其の御薙に紛る」となる。しかし、車の垂れ飾りに「乗る」というのも考えにくいので、恐らく顔師古は「御」を天子の車を意味する名詞ととらえているのだろう。顔師古説に拠ったと思しきKnechtges氏も、「御」を「chariot(馬車)」と訳している。一方、五臣(呂延濟)は「銜薙」を文字通りに解釈し、「鸞や鳳に紐の飾りを口にくわえさせる」としている。「言使疾風扶車轄、鸞鳳銜纓綏也」という注文から見ると、ただ口にくわえさせるだけではなく、疾風と同じように、車の進行を助ける役割をも、鸞鳳は担っているように思われる。中島千秋氏の訳は、その辺りのニュアンスを前面に出している。

「甘泉賦」の冒頭部、天子が車に乗りこむ段階では、鸞も鳳凰も飾り、ないし模様であった。「於是乘輿迺登夫鳳皇兮、

翳華芝（かくして天子は、鳳凰の飾りのある車に乗りこまれ、その姿は車の華蓋にかくれた）。顔師古は「鳳皇者、車以鳳皇爲飾也」と注し、李善も韋昭を引いて「鳳皇爲車飾也」と注する。また、供ぞろえの車は「咸翠蓋而鸞旗（どれも翡翠の羽の車蓋に鸞をえがいた旗）」を立てていた。だが、現在問題となっている天子遊行のシーンでは、明らかに飾りではない、生きた鳳凰と鸞が、天子の車とともに飛行している。この鳳凰と鸞は一体何をしているのか。「御薙」と「銜薙」、いずれに作るのが正しいのか。他の類似した用例を見ていくことにより、以上の点について考えてみたい。

【用例・考察】

〔用例①〕『楚辭』『離騷』に「鸞皇爲余先戒兮、雷師告余以未具。（鸞皇余が為に先戒し、雷師余に告ぐるに未だ具はらざるを以てす）」とある。王逸注に「鸞、俊鳥也。皇、雌鳳也。以喻仁智之士。雷爲諸侯、以興於君。言己使仁智之士、如鸞皇、先戒百官、將往適道、而君怠墮、告我嚴裝未具。（鸞は俊鳥である。皇は、雌の鳳である。これを用いて仁智の士に喩えている。雷は諸侯であり、これを用いて君主に比する。自分は鸞鳳のような仁智の士に先に百官を戒めさせ、正しい道に進もうとしているのに、君主が怠惰なために、装束がまだ整っていないなどと私に告げてきたことを言っている）」とある。しかし、鸞鳳が百官を戒めているとする点、雷師を君主に比するとし、その怠惰な君主が装束の整わぬことを口実にして正しい道を主人公とともに歩もうとしない、とする点などには、後世の注家から多くの反論が出ている。ここでは、明の汪瑗『楚辭集解』に「戒謂戒嚴其道、先戒猶先驅也。（戒とは、その道中を邪魔するものがないようにすることを言う。先戒とは、先驅と同じ）」とあるのに従いたい。游国恩『離騷纂義』もこの説を支持している。また「未具」についても、同じく汪瑗の『楚辭集解』に「具、備也。指車駕而言。（具とは、準備することである。車駕を指して言っている）」とあるのに従う。以上によって、先に引いた離騷の本文を訳出すると、「鸞や鳳凰が私のために先に駆けて露払いをし、雷師（雷の神）が供ぞろえの車馬がまだ整わないことを私に告げてきた」となる。

〔用例②〕『楚辭』「離騷」に「鳳皇翼其承旂兮、高翺翔之翼翼。」（鳳皇は翼しんで其れ旂を承げ、高く翺翔して之れ翼翼たり）とある。王逸注に「翼、敬也。旂、旗也。畫龍虎爲旂也。言己動順天道、則鳳皇來隨我車、敬承旂旗、高飛翺翔、翼翼而和、嘉忠正、懷有德也。」（翼は、つつしむこと。旂は、旗のこと。龍虎の姿を描いて旗にするのである。自分が天道にしたがって行動すれば、鳳皇がやってきて自分の車につき従い、つつしんで旗をささげ持ち、高く飛翔して、慎みぶかく調和し、忠正を賛美して有徳を思うことを言っている）とある。また五臣注（劉良）に「言我行順天道、故鳳皇承旂、引路飛翔、翼翼然扶衛於己。」（わが行動が天道に従っているので、鳳皇が旗をささげ持ち、道を先導して飛翔し、つつしんで護衛していることを言っている）とある。以上を踏まえて、先に引いた離騷の本文を訳出すると、「鳳皇がつつしんで旗をささげ持ち、うやうやしい様子で高く飛翔している」となる。また、離騷の当該句を、『文選』李善本では「鳳皇翼其乘旂兮」に作り、五臣注本では「鳳皇粉其承旂兮」に作ることに注意したい。これについては、後にまた論じる。

〔用例③〕『楚辭』「遠遊」に「鳳皇翼其承旂兮、遇蓐收乎西皇。」（鳳皇は翼しんで其れ旂を承げ、蓐收に西皇に遇ふ）とある。王逸注には「俊鳥夾轂而扶輪也。西方庚辛、其帝少皓、其神蓐收。西皇、即少昊也。」（俊鳥が車のこしきを挟んで車輪が進むのを助けるのである。西方は庚辛の方角で、その帝を少皓といい、その神を蓐收という。西皇とは、すなわち少昊のこと）とあり、これによって訳すと、「鳳皇はつつしんで旗をささげ持ち、西方の帝少皓のところで、私はその神蓐收に会った」となる。

〔用例④〕『楚辭』「惜誓」に「飛朱鳥使先驅兮、駕太一之象輿。」（朱鳥を飛ばして先驅せしめ、太一の象輿を駕す）とある。王逸注には「言己吸天元氣、得其道真、即朱雀神鳥爲我先導、遂乘太一神象之輿、而遊戲也。」（自分は天の根元

の気を吸って道德の真諦を得たので、神鳥の朱雀が私のために先導をし、そこで太一神をかたどった車に乗って遊ぶのだ、ということを行っている」とある。また、洪興祖の補注には「淮南云、左青龍、右白虎、前朱鳥、後玄武。（淮南子にいう、左に青龍、右に白虎、前に朱鳥、後ろに玄武）」とある。

【結論】

以上の用例をみて気づくのは、『楚辭』において鳳凰や鸞鳥が主人公の車とともに飛行する際、往々にして先導の役割を担っていることである。鳳凰のような霊鳥がお供をするということ自体が、主人公の高潔さ、徳の高さを表すことは言うまでもないが、彼らの役割はそれにとどまっていまいということだ。用例②と③で、鳳凰が旗をささげ持つのも、先導役にふさわしい行為といえる。用例③の王逸注には「俊鳥來轂而扶輪也」とあるが、これなどは、「甘泉賦」の「風從從而扶轄兮、鸞鳳紛其御蕤」について、鸞鳳が天子の車の進行を助けるという解釈が出たことと決して無関係ではないだろう。

なぜ鳳凰や鸞鳥が先導役なのか、その理由はよく分からない。用例④で、「朱鳥」が先導役をすることに対して、洪興祖は『淮南子』（兵略訓）を引いて説明している。これは明らかに五行思想に基づくものであり、実際、先に引いた「惜誓」の二句には、その後に「蒼龍蚬虬於左驂兮、白虎騁而爲右駢」と続き、青龍が左（東）に、白虎が右（西）に控える構図をとっているのが分かる。『國語』『鄭語』に「故先王以土與金木水火雜、以成百物」とあり、『尚書』『洪範』にも「一五行、一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土」と見えるなど、五行思想そのものは、先秦時代の文献からその存在が窺える。だが、それが体系的に整えられ、五獸（青龍・朱雀・黃龍・白虎・玄武）が各方向に配置されるようになったのがいつなのか、それはまた別の問題である。そうである以上、漢代の作（伝賈誼作）とされる「惜誓」はともかく、先秦時代に成った「離騷」や「遠遊」において、鳳凰や鸞鳥が先導役をしている理由を、五行思想で説明

することには慎重になる必要があるだろう。

靈獸と各方向との対応関係については、馮時氏が興味深い指摘をしている。氏は、趙宝溝文化に属する小山遺跡（於内モンゴル自治区赤峰市敖漢旗）出土の陶尊に描かれた星象図と、仰韶文化に属する西水坡遺跡（於河南省濮陽市）四十五号墓出土の貝殻で描かれた星象図を分析した上で、龍・虎・鳥・麟の四象が当時すでに形成されていたことが、この両星象図によって示されているとし、かつこうした四象の觀念は、周代の銅鏡（具体的には、河南省三門峽市上嶺村虢国墓地一六一二号墓から出土した、鳥獸紋鏡）や、戦国時代の星象図（具体的には、湖北省隨州市の曾侯乙墓から出土した、漆箱蓋面天文図）からも、引き続いて見出すことができる⁽¹⁾と述べている。小山遺跡出土の陶尊は、馮時氏の推定では約紀元前四十八世紀、西水坡遺跡の星象図は、約紀元前四十六世紀である。すなわち、四獸（ただし漢代までは玄武の代わりに麒麟）の觀念は、相当古い時代にまでその起源を遡ることができるのである。

ここで注意すべきは、馮時氏が指摘している通り、前述した諸々の星象図において、四獸が天宮の東西南北にそれぞれ配され、定位置を占めている点である。すなわち、龍は東宮、虎は西宮、鳥は南宮、麟は北宮に例外なく対応している。王小盾氏も馮氏の論に賛同し、四獸は周代においてすでに動物神、或いは天文神として、東西南北四方の星空を代表していたと述べており、それと同時に、漢代になると五行の觀念と結合して四獸（或いは黃龍を加えて五獸）が体系化され、民衆生活の各方面に浸透した芸術符号になっていった点をも指摘している。以上の点に加え、徳の高い者は南面するという觀念が古代において存在していたことを考え合わせれば、⁽²⁾「離騷」や「遠遊」において、靈鳥が主人公の先導役をしていることは、南宮と鳥が対応していたことと、何らかの関係を見出せるのではないだろうか。今はその可能性を指摘するに留めておきたい。

ところで、用例②に挙げた離騷の句（鳳皇翼其承旂兮）に、テキスト間で文字の異同があることに注意する必要がある。『文選』李善本では「鳳皇翼其乘旂兮」に作り、五臣注本では「鳳皇粉其承旂兮」に作るのである。「甘泉賦」の

「鸞鳳紛其御蕤」に、「御、猶乗也」と注した顔師古は、この離騷の異文を参考にしたと思われる。だが、テキストとして「乗」と「承」、いずれがより信頼できるだろうか。この文字の異同は、字形の類似から生じたと思しいが、ただ「鳳皇翼其承旂兮」という句は、用例③に挙げた「遠遊」にも一字違わないのが見られるのである。且つ、「遠遊」の方では、「承」を別の字に作るテキストは管見のかぎり見当たらない。そうである以上、「鳳皇翼其○旂兮」の○に入るのは、名詞である「乗（＝車）」ではなく、動詞である「承（＝ささげ持つ）」だと考えるのが自然ではないだろうか。

ここで「甘泉賦」の問題箇所に戻ろう。用例②・③の句と酷似した構造をもつ「甘泉賦」の「鸞鳳紛其○蕤」において、○に入るのはいずれも動詞と考えられる。先述したように、「御蕤」の「御（乗る・制御するの義）」は、ここでは動詞では読みにくい。つまり、『文選』系の「鸞鳳紛其御蕤」が後に残ることになる。『楚辭』において、鳳凰や鸞鳥が主人公の車の先導役となっていることは、すでに述べた。では、我々はこの「蕤を銜える鸞鳳」から、どのようなイメージを浮かべるべきであろうか。ここで思い出されるのは、わが国正倉院の宝物に頻見される、「含綬鳥文」と呼ばれる文様である。「含綬鳥文」とは、ひも状の飾り（綬帶）を口にくわえた鳥類の文様であり、代表的なものとしては、北倉の鳥獸花背八角鏡第三号や、同じく北倉の螺鈿紫檀阮咸槽部背面の文様などが挙げられる。こうした文様は、西方のササン朝ペルシア（二二六～六五一年）に起源をもち、唐を経由して日本に伝来したものとされている。⁽⁶⁾

「含綬鳥文」は、唐人の間でも大いに流行したようで、中国各地で出土している金銀器や銅鏡などにもしばしばあらわれ、また晩唐の李遠「剪綵」詩（『全唐詩』巻五二九）に「剪綵贈相親、銀釵綬鳳真、雙雙銜綬鳥、兩兩度橋人」とあるなど、文学作品にもその痕跡を留めている。また頸に綬帶を巻いた鳥や、足首にリボンを巻いた馬の意匠も、「含綬鳥文」と同じくペルシアから伝わったものと考えられている。⁽⁸⁾

興味深いのは、中国の地において綬帶をくわえる、或いは身に帯びる意匠が、前漢の出土文物にまでさかのぼって確認できることだ。増田精一氏は、論文「綬帶をつけた鳥獸意匠の比較——東西文化交流に関連して——」の中で、この

意匠の先駆的な形態が漢代の出土文物に見られることを、実例を挙げながら指摘している。⁽⁹⁾氏が挙げている例の中でも古いものは、前漢代の「長沙馬王堆一号漢墓帛画」であり、そこには首に黒いリボンが結ばれた赤い蛇と二匹の亀が描かれている。⁽¹⁰⁾また、同じく前漢代の「長沙砂子塘一号西漢墓外棺漆画」では、壁の穴に首を通した一對の鳳凰が、それぞれ玉器を吊るした綬帯を口にくわえているのである。⁽¹¹⁾前漢（紀元前二〇六〜八年）は時代的にササン朝ペルシアに大きく先行することから、これらの出土文物に見られる鳥獣の意匠は、西アジアから中国に波及してきたものではなく、中国で独自に発生したもので、むしろ西方に影響を及ぼしたのではないかと増田氏は述べている。井口喜晴氏も、論文「昨鳥文の系譜——含綬鳥文を中心として——」の中で、馬王堆の帛画や砂子塘の漆画等を根拠とし、これらの意匠が「中国で発生したことも十分に考えられる」と述べている。⁽¹²⁾井口氏が同論文で指摘しているように、後漢の時代になると画像石や石刻にも「含綬鳥文」の意匠が用いられるようになり、その中には、山東省沂南県北寨村にある沂南画像石墓中室の八角柱斗拱部の画像のごとく、綬帯をくわえた朱鳥が空を飛んでいるものも確認できるのである。⁽¹³⁾

なお、井口氏が前掲論文で指摘するように、「含綬鳥文」の意匠は南北朝時代に入るとほとんど確認できなくなり、鳥が花枝をくわえた文様（いわゆる「花喰鳥文」）がそれに取って代わるのだが、西方ペルシアの文化が流入してくる唐代になると、その影響を受けた意匠が再び盛んに用いられるようになる。このことから、すべての「含綬鳥文」の淵源は中国にあるのか、唐代以降に見られる「含綬鳥文」は、漢代の出土文物に見られた意匠とどのように関わるのかは、まだ問題として残されている。ただ、少なくとも前漢代に「含綬鳥文」に類する図像が描かれていたことは、確かな事実である。こうしてみたとき、問題となっている「甘泉賦」の「鸞鳳紛其銜蕤」についても、従来とは異なった解釈が考えられる。前漢末の揚雄がここで描いたのは、画像石にも描かれていた、口に綬を含んで飛翔する靈鳥の姿ではないだろうか。増田氏は、後漢の画像石などに描かれた神仙や靈獣が、しばしば長い綬帯をもち、それをなびかせて飛翔していることから、中国ではこうした綬帯に呪術的な力があると考えられていた可能性を指摘している。馬王堆の帛画で、

蛇や亀の首に綬帯が結ばれていたのも、それを結ぶことによって超現実的な力を付与し、本来は地を這う生き物である彼らが、天界を飛翔する呪力をもつことの一つの標識にしていたと言うのである。⁽¹⁴⁾井口氏は、長沙砂子塘の漆絵で鳳凰がくわえている綬帯に珩という玉器が吊るされていることに着目し、こうした玉器が神々や祖先の霊を憑らしめるなど、超自然的な力をもつものと考えられていたことから敷衍して、綬帯そのものも「何か特別な力をもつ道具と考えられる」と述べている。⁽¹⁵⁾そこから考えると、「甘泉賦」において「鸞鳳」のくわえる綬帯は、靈獣としての資質をあらわし、彼らに導かれる天子の行列が、常人には到達できない領域を飛翔しつつあることを示しているのではないだろうか。なお、顔師古や Knechtges、日本の訳者は「蕤」を「車のひも」や「車に垂らす飾り」と解釈していた。だがこは、李善や五臣がそうしているように、車に限定して考えない方がよい。「蕤」は同音の「綏」に通じ、垂れ下がった紐状の飾りを広く指すからである。⁽¹⁶⁾

以上を踏まえて、筆者は「甘泉賦」の当該句から、綬帯を口にくわえた鸞鳥や鳳凰が、入り乱れつつ天子の車を先導しているイメージを思い浮かべたい。

注

- (1) 馮時著『中国天文考古学』（社会科学文献出版社、二〇〇一）第六章「星象考源」第五節「四象起源考」を参照。
- (2) 王小盾著『中国早期思想与符号研究——關於四神的起源及其体系形成』（上海人民出版社、二〇〇八）「緒言」を参照。
- (3) 『易經』「説卦」に「聖人南面而聽天下、嚮明而治」、また『論語』「雍也」に「子曰、雍也、可使南面」とある。
- (4) 正倉院事務所編『正倉院の金工』（日本経済新聞社、一九七六、図版第三）。
- (5) 正倉院事務所編『正倉院の楽器』（日本経済新聞社、一九六七、図版第十八）。
- (6) 林良一著『シルクロード』（美術出版社、一九六二）、「真珠の首飾」の項、ロマン・ギルシュマン著（岡谷公二訳）『古代イランの美術』Ⅱ（新潮社、一九六六）、二二八頁などを参照。

- (7) 代表的なものとしては、東京国立博物館蔵の双鸞雲電文八稜鏡に彫られた、綬帶をくわえて向かい合う二匹の鳳凰の文様がある。梅原末治編『唐鏡大観』（美術書院、一九四五）図版五十一。
- (8) 頸に綬帶を巻いた鳥の例としては正倉院北倉の鳥獣花背八角鏡第一号が、また足首にリボンを巻いた馬の例としては法隆寺に伝わる四騎獅子狩文錦が、それぞれ挙げられる。
- (9) 『東洋学術研究』第十一卷・第三号、一九七二、一〇二〜一〇六頁。
- (10) 湖南省博物館、中国科学院考古研究所編『長沙馬王堆一號漢墓』（文物出版社、一九七三）下集図七一。
- (11) 湖南省博物館「長沙砂子塘西漢墓發掘簡報」（『文物』一九六三年第二期）図版一一。
- (12) 『Museum、東京国立博物館美術誌』通号三七五、一九八二、一三頁。
- (13) 崔忠清主編・山東省沂南漢墓博物館編『山東沂南漢墓畫像石』（齊魯書社、二〇〇一）図五一。
- (14) 注9前掲増田論文、一〇四〜一〇五頁。
- (15) 注12前掲井口論文、六・一二頁。なお、増田氏と同様に井口氏も、沂南画像石において綬帶をもつ動物がいずれも有翼の靈獸、靈長類であることを根拠とした上で、「綬帶や帯などが他の鳥獣類と異って何らかの力を付加させる役割を果たしたものと考えられる」と述べている（同論文一二頁）。
- (16) 『禮記』『雜記上』の「緇布冠、不蕤」（孔類達の疏に「緇布冠、不蕤者、以緇布爲冠、不加綏」）では冠の垂れ飾り、晋・左思「呉都賦」（『文選』卷五）の「羽旄揚蕤、雄戟耀芒」では、旗さしものの垂れ飾りを指している。